

## 都市伝説研究の理論的視角

著者	張 敦福, 魏 泉, 李 軒羽
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	134
ページ	27-38
発行年	2020-03-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028558">http://hdl.handle.net/10236/00028558</a>

## 都市伝説研究の理論的視角\*

張 敦 福\*\*  
魏 泉\*\*\*  
訳 李 軒 羽\*\*\*\*

## 訳者解説

本稿は、中国語による論文、張敦福・魏泉、2006、「解析都市伝説的理論視角」『民間文化論壇』2006(6):24-29. を日本語に翻訳したものである。都市伝説とは、現代社会に起こる不思議な出来事についてのうわさ話・世間話のことである。「友達の友達が教えてくれたこと」の形で流布することが多いが、近年では「自分が体験したこと」と主張し、インターネット上で話を広めようとする語り手も増えている。

本論文で述べられているように、欧米諸国に目を向けると、都市伝説的な話を扱う研究は、少なくとも1940年代までさかのぼることができる<sup>1)</sup>。そしてその後、リチャード・ドーソンやアラン・ダンデスなどの民俗学者によって理論構築が進展している。特に1988年にイギリスで、都市伝説を研究するための国際学会が創立されて以来、英語圏で盛んに行われるようになった。2019年現在、37回開催されているこの学会の年会には、世界各国の研究者が集まり、さまざまな資料と研究方法が蓄積されている。全体的にみると、

これまでの国際研究は、主に、①タイプ・インデックス（話型索引）の作成、②個別事例に対する考察、③パフォーマンス理論に対する考察、④マスメディア経由の伝播現象に対する考察、⑤研究史に対する考察、という5つの側面から展開されてきた<sup>2)</sup>。中国の都市伝説研究も、このような国際研究から深い影響を受け、数多くの成果が上がっている。

「都市伝説」という概念が中国に導入されるに至ったのは1990年代前半のこと<sup>3)</sup>である。主に李揚や本文の著者である張敦福の翻訳を通じて、中国の学界で知られるようになった。2000年代以降は、「都市伝説」よりも“contemporary legend”の訳語「当代伝説」（日本では「現代伝説」と訳されている）のほうが学術用語として定着し、今日に至っている。中国の先行研究では、このような国際研究における知見の援用が進行しているだけではなく、中国民俗学独自の知見もいくつか存在する。その中でも、王傑文の「反伝説」理論<sup>4)</sup>や陳冠豪の「恐怖方程式」理論<sup>5)</sup>が特徴的なものとしてあげられるだろう。

\*キーワード：都市伝説、理論と方法、都市の新しい民俗

以下、脚注において、1)、2) …は原注を、1]、2] …は訳注を表す。

\*\*中国・上海大学社会学院教授

\*\*\*中国・華東師範大学中国言語文學院准教授

\*\*\*\*関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

1] たとえば、Cantril, Hadley, 1940, *The Invasion from Mars: A Study in the Psychology of Panic*, Princeton: Princeton University Press. (=2017, 高橋祥友訳『火星からの侵略—パニックの心理学的研究』金剛出版。)では、1938年にアメリカで流布していた「火星襲来」のうわさが取り上げられている。

2] 王傑文、2012、「作為文化批評的“当代伝説”—“当代伝説”研究30年(1981-2010)」『民俗研究』2012(4):30-36.

3] Brunvand, Jan Harold, 1978, *The Study of American Folklore: An Introduction (2nd Edition)*, New York: Norton. (=1993, 李揚訳『美国民俗学』汕頭大学出版社.)

4] 「反伝説」とは、怪談のはずだった話が、語り手の二次創作（本来の結末に変更を加えるなど）によって笑話 ↗

欧米を中心とする 20 世紀の発足から 21 世紀初頭までの都市伝説研究の歩みを整理し、都市伝説研究の方向性を明確に示した本論文は、発表から十数年が経過している現在においても、中国の関連研究でしばしば引用され、研究を進めていく上で必要不可欠な文献とみなされている。

## はじめに

1940 年代から、海外の民俗学者が都市伝説 (urban legend) または現代伝説 (contemporary legend)<sup>6)</sup>の研究をすでに始めている。1968 年、リチャード・ドーソン (Richard M. Dorson) が “urban legend” という用語を初めて使い、これを「生きられた伝統の一部」とみなしている (Dorson 1968: 154-169)。1970 年代に入り、研究者が持つ都市伝説に対する関心の高まりにより、都市伝説研究が全盛期を迎え、口頭伝承のひとつともいえる都市伝説も、本格的に研究者の視野に入り、都市の新しい民俗として位置づけられるようになっていった。ただし、これまでの研究者は、都市伝説研究の理論的視角と道筋について議論を盛り上げる機会がなかった。

1980 年代に入ってこの状況が大きく変わり、同じ興味を持つ研究者の間で関連理論や方法をめぐる議論がなされるようになった。中でも 1982 年にシェフィールド大学 (University of Sheffield) のイギリス文化伝統・言語センター (Centre for

English Cultural Tradition and Language) が主催した国際シンポジウムは画期的な動きである。このシンポジウムの目的は、現代伝説の研究者に自由な討論ができる場を提供することであり、どのような立場に立って都市伝説をとらえ、分析し、研究すべきか、都市伝説という「未開の地」をいかに拓くかについて交流を展開することでもある。気楽に会議を行うほか、緊張感のある討論、建設的な批判もよく見かける光景である。これ以外に、ISLR<sup>7)</sup>も『シリーズ「現代伝説の視角」』(The Perspectives on Contemporary Legend Series) を刊行するとともに、1982 年度シンポジウム以外の論文 (計 4 巻) と参考書目を公開している。

事実上、シェフィールド大学から始まった一連のシンポジウムはひとつのスタートラインにすぎない。近年、次々と公表される文献が、研究に多くの可能性をもたらし、都市伝説を見極め、分析する視角、道筋、方法はさまざまな方向へと発展している。しかし、文献は数え切れないほどあるにもかかわらず、中国の学界であり知られていないのが現状である。したがって、本論文は、関連理論や方法を紹介した上で、簡単な評価を下し、都市伝説研究の全体像をある程度把握しようとしている。

## 一、フォートの神秘主義

チャールズ・フォート (Charles Hoy Fort,

- 
- ↘ 化される現象である。詳しくは、王傑文, 2005, 「乗車出行的幽霊 - 關於“現代都市伝説”与“反伝説”」『民俗研究』2005(4): 146-159. を参照すること。
- 5) 「恐怖方程式」とは、論文の第二章「言語学的分析」を参考にした上で構築されている、怪談を分析するための理論である。現代中国で流布する怪談の多くが、①非合理的な事件が発生→語り手がその理由を解釈する、②非合理的な事件自体=解釈 (聞き手が自分の生活経験でその理由を判断する)、③ (主人公のいる環境などを) 語り手があらかじめ解釈する→非合理的な事件が発生、という三種類のパターンから構成されていると陳冠豪が指摘し、それに基づいて当該理論を提案している。詳しくは、陳冠豪, 2011, 「中国当代恐怖伝説之“解釈”結構探討」『民族文学研究』2011(5): 31-41. を参照すること。
- 6) 中国の学者による都市伝説 (または現代伝説) の紹介や研究については、下記文献を参照すること。  
①Brunvand, Jan Harold, 1981, *The Vanishing Hitchhiker: American Urban Legends and Their Meanings*, New York: Norton, 1-13. (=2000, 李揚・王珏純訳「旧篇新章 - 美国都市伝説略談」『民俗研究』2000(4): 68-74.) ②Brunvand, Jan Harold, 1981, *The Vanishing Hitchhiker: American Urban Legends and Their Meanings*, New York: Norton, 13-16, 197-202. (=2003, 張敦福訳「都市伝説的研究方法」『民俗研究』2003(2): 61-66.) ③張敦福, 2005, 「都市伝説初探」『民俗研究』2005(4): 131-145. ④王傑文, 2005, 「乗車出行的幽霊 - 關於“現代都市伝説”与“反伝説”」『民俗研究』2005(4): 146-159. (注 4) の引用文献でもある)
- 7) 1988 年にシェフィールド大学で創立された国際現代伝説研究学会 (International Society for Contemporary Legend Research) のことを指す。この学会は、会報 *FOAF Tale News* のほか、年会も開催し、年刊形式で学会誌『現代伝説』(Contemporary Legend, 1991-) を発行する。

1874-1932) は、一生をかけて、科学で解釈できない現象や科学が目撃しない現象にまつわる資料を収集する、少し風変わりなアメリカ人の男性であった。彼は、天気、動物、日常生活の中の怪奇現象や、他分野で科学的に解釈されていない現象に夢中になり、最終的に4巻の「怪奇現象アンソロジー」の発行に至った。その後、彼の足跡を踏まえ、この分野をさらに掘り下げようとする崇拜者もあり、こういう崇拜者たちが生まれた。その崇拜者たちもまた、自分のことを「フォーティアン」(Fortean)と呼ぶようになり、中でもローレン・コールマン(Loren Coleman)が最も目立っている。コールマンは、「(私たちは、)世界中にみられる多くのまだ解明されていない現象を、オープンマインドな考え方でとらえている。これも、私たちのいるこの分野の基本理念である」と、「フォーティアン」たちの生活世界を述べている(Coleman 1983)。自分のことに言及する際も、「私は、何も信じていないが、この世では、何でも起こりうると信じている」と打ち明けている。こうした説明は、基本的に、「フォーティアン」たちの世界観と方法論を反映し、「フォーティアン・アプローチ」(Fortean Approach)と呼ばれている(Brunvand 2001:158)。この概念が反映する実際の意味を熟慮した上で、筆者はこれを「フォートの神秘主義」と翻訳した。

フォートの後継者たちは、フィールドワークや図書館で類似の資料や情報を収集し続け、さらに

生まれてくる新たな怪奇現象を解釈しようとする情熱も、彼らの先輩と異なっている。「一匹狼」の状態から抜け出した彼らは国際レベルの同好会も創立し、ロンドンで独自の出版物、月刊『フォーティアン・タイムズ-怪奇現象ジャーナル』(Fortean Times: The Journal of Strange Phenomena)を発行し始めた。この刊行物は、毎年ロンドンで「非正規」(unconvention)の名を冠した二日間のイベントを開催し、同じ趣味の人を招待するだけではなく、関連問題をめぐる議論をも促進していく。しかも公式のウェブサイトも運営されている<sup>8)</sup>。「フォーティアン」たちの研究テーマは、変な動物、妖怪、幽霊、UFOなど、多岐にわたっている。学科系統分類の中にある「未確認動物学」も、時々、「フォーティアン・アプローチ」の一分野であるといわれている。「フォーティアン」たちの研究は、都市伝説とある程度被っており、「下水溝のワニ」(Alligators in the Sewers)<sup>9)</sup>、「駆け回る大きな猫」(Big Cats Running Wild)<sup>10)</sup>、「ファントム・クラウン」(The Phantom Clowns)<sup>11)</sup>、「消えるヒッチハイカー」(The Vanishing Hitchhiker)<sup>12)</sup>のいずれも、彼らがよく取り上げる伝説である。

神秘主義と超自然主義の概念はいくつか重なっている部分がある。超自然主義も、「消えるヒッチハイカー」、「ラ・ヨローナ-泣く女」("La Llorona" - The Weeping Woman)<sup>13)</sup>、「ファントム・コーチ」(The Phantom Coachman)<sup>14)</sup>のような

8) 2019年現在のサイトリンクは <https://subscribe.forteanimes.com/>。

9) この伝説のスタンダード・バージョンについては、注7)の③を参照すること。

10) 都会や郊外で大きな猫(もしくはヒョウ)が暴れているという話。時には具体的な地名が出ていて、その場所で「動物の足跡を見た」、「動物の正体を実際に目撃した」の話もある。特にアメリカ・ミシガン州でこのような話が盛んに語られている。

11) アメリカ全土に広まっただけでなく、イギリス、フランスなどの西欧諸国でもよく知られているうわさ。基本的なパターンは、「道化師の格好をしていて軽バンで移動するある犯罪組織が、特定の色(黒と青の場合が多い)の服を着た子どもを誘拐、殺害しようとする」。主に幼い子どもたちの間で流布する。学校の近くに潜んだり、クラスメートを乗せたりするのを目撃したと主張する子どももいる。

12) 張敦福、2006、「消失の搭乗客-中西都市伝説の一個類型-」『民俗研究』2006(2):61-76。

13) 原文は「為要淹死の人哭救の幽霊」(水死者を嘆き悲しむ幽霊)。メキシコなどの中南米の国で語られる怪談。基本的なパターンは、「夫に浮気されて狂った女性がいた。夫がふたりの子を溺死させた後、女性自身も川へ飛び込んで自殺してしまった。しかし、悪霊となった彼女はまだ怨念を抱えてこの世を彷徨っている。主に水のある場所に出没して、自分の泣き声を聞いた子どもをさらっていく」。

14) あらかじめ自分の死を意識した予兆譚。基本的なパターンは、「ある女の夢の中に、繁華街を通りかかる葬式行列の光景が出てきた。霊柩車の運転手は背が高く、やや尖った顔立ちをしている男だった。翌日、デパートへ買い物に行った彼女は、エレベーターの中でまったく同じ顔の男に出会った。まもなくエレベーター急降下の事故が発生して、彼女を含む客全員が死んでしまった」。

怪談、あるいは現代の若者がよく語る、死人が生き返ったというような「怪奇事件」を取り上げ、一部の超自然主義的な伝説（たとえば、「ダンスホールの悪魔」(The Devil in the Dance Hall)<sup>15)</sup>、「地獄へ通じる井戸」(The Well to Hell)<sup>16)</sup>は、宗教とも深くかかわっている。このタイプの伝説を、自分の宗教理念を宣伝するための理論上の資源として使うカルト宗教もある。実際には、これと類似した考え方に基づく行為は、必ずしも古い時代の人々に限らない。インディアナ大学のリンダ・デグ (Linda Dégh) も、「神、幽霊、怪異に関する内容は、伝統的な、農村的な伝説だけに存在するとはいえない」、「現代の工業社会が多くの非理性的なものを生み出している。このタイプの伝説の存在と流布は、まさにこの点を反映している」として、「都市伝説というのは、果たしていかなるものか」についての思考を深めていった。「伝説とは、変わりつつある事実にまつわる異常な、超自然的な経歴であり、だれにでも起こりうる一方、その人が所属する社会文化の中で広く受け入れられている規範や価値観と矛盾している」と、デグは伝説の本質を論じている (Linda Dégh 1991: 11-38)。

## 二、言語学的分析

言語は物語を構成する重要な部分であり、多くの研究者も、言語学から都市伝説を分析、解釈しようとする。この「言語学的アプローチ」(linguistic approach)を「構造言語学的分析」(linguistic-structural analysis)と呼ぶこともある。ただし、伝説の構造言語学的分析にとって、完成度の高い「物語テキスト」(narrative text) (少な

くとも「物語ととらえられるテキスト」)が必要不可欠である。

社会言語学者のウィリアム・ラボフ (William Labov) によると、ひとつの完成度の高い物語は、6つの構造要素を備えているという。すなわち、概要 (abstract 語り手による物語の要約)、縁起 (orientation 語り手による、物語の発生時間、場所、人物とその活動、環境などの外部要素に対する説明)、展開 (complicating action 物語自体の発展プロセスであり、物語構造 (narrative structure) の核心でもある)、評価 (evaluation 語り手のとらえ方、態度など)、結論 (resolution 事件の結末、人物の運命など)、締めくくり (coda テーマとの呼応) のことを指す。民俗学者のウィルヘルム・フリッツ・ヘルマン・ニコライセン (W. F. H. Nicolaisen) がラボフの考え方を参考にし、伝説「びっくりさせるつもりの方がびっくりしてしまう話」(The Surpriser Surprised)<sup>17)</sup>の28のバージョンを研究した結果、伝説を構成する核心的な要素は3つしかない (縁起、展開、結論) のが明らかになった。それだけではなく、都市伝説として語られる物語が一種のユニークな特徴を持つことも彼は発見した。つまり、語り手が知っている肝心な情報が、「縁起」の段階では省略され、隠され、「展開」の段階に入ってようやく聞き手に告げられるという特徴がある。たとえば、伝説「びっくりさせるつもりの方がびっくりしてしまう話」の中で、「みんなが企画した、男女ふたりのためのサプライズパーティーなのに、会場に着くと、全裸になったふたりにみんなが気づいてしまった」ことも、聞き手は最後まで聞いてようやく告げられるのである。語られるプロセスにおいて、「縁起」が引き延ばされるのも多くの都

15) メキシコ人やメキシコ系アメリカ人の中で流布する怪談。基本的なパターンは、「ダンスホールで出会ったイケメンと仲良くなった少女は、なんと、ダンスのうまい彼の足がニワトリの脚だと発見したのだ。つまり、典型的な悪魔の印だ」。

16) 1990年代初頭頃から欧米諸国で語られ始めた怪談。日本のインターネット上で「地獄の声」と呼ばれる場合が多い。基本的なパターンは、「シベリアのコラ半島の削岩機で掘った深い穴から地獄の阿鼻叫喚が聞こえた」。ブルンヴァンの調査によると、アメリカの雑誌『クリスチャニティ・トゥデイ』(Christianity Today)の1990年7月16日号に掲載されているあるフェイクニュースがこの話の元ネタだった。

17) 主に3つのバージョンが存在する-「私が秘書を辞めさせた理由」、「サプライズパーティーで裸になる者」、「暗闇の中で尻をひる」。一番目のバージョンは、「会社の上司を自宅に誘った女性の秘書が、〈セックスの誘い〉と誤解されてしまった。〈上司の誕生日パーティーにサプライズを〉と思う秘書と会社の職員たちが家に飛び込んだとき、その場にいるのは、ただ靴下だけを履いている素っ裸の上司だった」。

市伝説の構造に見出される重要な特徴であると、ニコライセンは論じている。それに加えて、物語をうまく語れるか否か、明らかに、語り手が物語を操る手段がどれほど賢いかにもよる。「これは、レジー・ジャクソン (Reggie Jackson 元アメリカ大リーグの野球選手) がエレベーターに乗るときの話」、「のどに人の指を詰ませたドーベルマンの話、知っている？」<sup>18)</sup>、「話に出てくるこの女はね、浮気性の夫が持つボルシェを安売りしようと思っているのよ」<sup>19)</sup>といった結末、解釈を、物語の最後に登場させるからこそ、人々を惹きつけられるようになり、さらなる効果が得られる。

その後も、ニコライセンはこの方向で研究を進め、「消えるヒッチハイカー」の物語構造について分析した論文を発表した。この論文は、ブルンヴァン (Jan Harold Brunvand) などの著名な研究者に言及し、「彼らの著作はあくまでも伝説のガイドブックにすぎない」と批判したため、十分に説得力のあるものといってよい。なぜなら、構造言語学的分析にとって、テープレコーダーが流す伝説の語られるプロセスは、テープ起こし作業で視覚的な資料よりはるかに好ましいからだ。多くの研究者に好まれており、細かい箇所まで整理が行われた視覚的な資料に立脚した方法は、簡単で行いやすいものの、こうして得た資料にも、ひとつの重大な問題が潜んでいる。つまり、現場ならではの面白さ、雰囲気、感覚が失なわれてしまうということである。この状況はまさに、「テキストは重要だが、そこに残されるのは、コンテキストがなく、〈生活から離れたもの〉だ。物語は紙に由来したものではなく、生世界に由来したものなのだ」という、人類学者のマリノフスキー (Bronisław Malinowski) による指摘によって説明することができよう。ある専門家が粗雑な作業で物語を記録する場合、その物語が発生したときの

具体的なコンテキストを示すことができなければ、彼が見せてくれるものは「不完全な真実」としか言いようがない。

### 三、文学的解釈

ほかの学科と比べ、文学は民俗学との親和性がより高い。文学の視角から都市伝説を研究する場合には、関連資料の収集と編集は、分析を進める上で最も基本的かつ必要な作業である。資料を収集、編纂すると同時に (もしくはその後)、研究者は、すでに発表された文学作品の中の伝説的な要素を識別しなければならない (たとえば、伝説としてのテーマと構造)。伝説の文学的研究にとって、これはただの始まりにすぎず、それ以上の比較分析はさらに難しい。

1991年、民俗学者のダニエル・バーンズ (Daniel R. Barnes) は、「一部の文学作品には、(都市伝説的な) 物語やプロットに間接的に触れたり、暗示したりする状況が存在する。それらの作品は、古代のものか現代のものか、ポピュラーなものかシリアスなものか、フィクションかノンフィクションかにかかわらず、そこに登場する物語やプロットは、現代の伝説にかかわっていると直ちに判断できなければ、民俗学者がそれを識別、分析、研究しなければならないのだ」と提案した。この考えを実践に移すのが極めて膨大な研究計画になるのは言うまでもないが、行動力のあるバーンズは、盛りだくさんの一次資料と二次資料の収集、識別を行った。その後、ポール・スミス (Paul Smith) がメンバーに加わったことで、バーンズが約20冊の参考資料を編纂し、童話から現代の探偵小説に至るまで、幅広く引証の範囲をカバーしている。有名作家のジョン・スタインベック (John Steinbeck) の『怒りの葡萄』やへ

18) ある婦人が家に戻ると、飼犬のドーベルマン (Doberman ドイツ産の猟犬) ののどに何が詰まっているのに気づいて、すぐさま獣医の元へ駆けつけた。犬の気管を切開する必要があるので、しばらく家に戻ったほうが良いと告げられた。婦人が帰宅すると電話がけたたましく鳴っていた。「すぐ家からでるんだ! 隣の家に行って電話で警察を呼びなさい!」とのこと。どうやら、獣医が手術をして気づいたのは、犬ののどに人間の指がつかえていることだった。その後、彼女の家にやってきた警察は、犬に指を噛まれた侵入者を発見した。

19) よくあるバージョン—ある男が、新聞で「新車同様のボルシェ、50ドルで売りたい」の広告を見た。興奮しながらも疑わしく思う彼は急いでその車を見に出かけた結果、まさかこれが本当のことだった。車売る女は、「夫が秘書とふたりで逃げちゃった。ほかのところから手紙が送られてきて、この車と家売ってその代金を送ってくれ」って書いてあったから」と、男に理由を告げたのだ。

ミングウェイ (Ernest Hemingway) の作品なども含まれており、ふたりはそれぞれ「おばあちゃんの遺体が消えた」(The Runaway Grandmother)<sup>20)</sup>と「売春宿の覗き魔」(The Voyeur in the Brothel)の都市伝説を使った<sup>21)</sup>。実のところ、文学と伝説のつながりは、「下水溝のワニ」、「のどを詰ませたドーベルマン」(The Choking Doberman)、「圧死した犬」(The Crushed Dog)<sup>22)</sup>、「包みの中に死んだ猫」(The Dead Cat in the Package)<sup>23)</sup>といった話にもみられる。

この学際的な分野では、明らかに民俗学と文学を併修する研究者のほうが優位を占めている。ブルース・ローゼンバーグ (Bruce A. Rosenberg) は民俗学者であり優れた文学者でもある。ローゼンバーグは、「バックシートの殺人者」(The Killer in the Backseat)<sup>24)</sup>や「消えるヒッチハイカー」など、いくつかの都市伝説を細かく分析したと同時に、エリザベス・ジェーン・ハワード (Elizabeth Jane Howard) が1979年に発表した『人違い』(Mr. Wrong)のような、類似のプロットと構造を持つ文学作品をも分析しようと試みた。「これは、文学と民俗学の間に存在する持続的な関係を証明する良い事例だ」と、彼は結論づけて

いる<sup>25)</sup>。特に、「一般人」としての語り手と、「作家」、「うまく語れる人」としての専門家の関係は、ふたつの学科がともに注目する重要な課題となっている。

都市伝説の文学的研究にあるもうひとつの展開方向は、現代における伝説の流布や流行と過去の作家の関係を識別することで、現在、ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer)、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe)、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens)、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne)、ジャック・ロンドン (Jack London) のいずれかの作品も、複数の伝説、もしくは特定の伝説の生成や流布に貢献していたのがすでに確認されている。たとえば、中世ヨーロッパで流布していた「去勢された少年」の話は同名伝説の原型になっていった。チョーサーがこの原型を加工し、二次創作をした結果、その代表作『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales)の中の「女子修道院長の話」(The Prioress's Tale)がついに出来上がった。続いて、イギリスの作家であるデフォーとディケンズも、彼らの時代に口承されていた伝説を参考にした経験があり<sup>26)</sup>、アメリカの作家ホーソーン作品から

- 20) 少なくとも、オーストラリアで語られるものとウクライナで語られるもの、というふたつのバリエーションが存在する。オーストラリア・バージョンは、「夫婦ふたりが、子どもとその祖母を連れて、車を運転して旅に出た。荒れ果てた野外を通っているとき、おばあちゃんは死んでしまった。ふたりは慌てて遺体を車の屋根上にくくりつけることにして、一番近い警察署へ、おばあちゃんが死んだことを届け出に行った。警察と一笑に警察署から出ると、車もおばあちゃんも行方不明になった」。
- 21) Bennett, Gillian and Smith, Paul, 2007, "Urban Legends in Literature," Gillian Bennett and Paul Smith eds., *Urban Legends: A Collection of International Tall Tales and Terrors*, Westport: Greenwood, 309-321.
- 22) 原文は「被圧碎的猫」(圧死した猫)だが、のちに、これが参考文献の Brunvand, Jan Harold, 2001, *Encyclopedia of Urban Legends*, New York: Norton. が取り上げる事例 "The Crushed Dog" (圧死した犬) の誤植だったことが判明。基本的なパターンは、「泊り客としてある有名家族の住所 (もしくはこの人の将来に重要な意味を与えられる人の家) にやってきた男が、部屋の中にあるインクつぼをこぼしてカーペットと家具を汚した。混乱状態になった部屋を片付けそうとしても結局できなかった。申し訳ないと思う彼はこっそりと出ていった。まもなく、許された彼は二度と誘われた。しかし今回、薄暗いラウンジにある、詰め物がいっぱい入った椅子に横たわる小さい犬の上に彼は誤って座ったのだ。圧死した犬の死体を隠してまた逃げた彼は、もう二度と戻ってこない」と決めたのだ。
- 23) 買い物中の客のバッグを盗んだ泥棒が袋を開けて発見したのは、その客が処分しようとする猫の死体だった。
- 24) ある女が夜間運転をするとき、ランプを激しく点滅させて後ろをつけてくる別の車に気づいた。緊張した彼女は急いで自分の家へと飛び込んだのだが、それでもまだ車は追ってくる。車の持ち主に怒鳴り声を上げようとする彼女がその場でもらった返事は、なんと「あなたの車のバックシートでナイフを振り上げる人が見えたんだ! 早く警察を呼びなさい!」という警告だった。
- 25) Rosenberg, Bruce A., 1991, "Urban Legends: The Modern Folktales," Bruce A. Rosenberg ed., *Folklore and Literature: Rival Siblings*, Knoxville: University of Tennessee Press, 220-235.
- 26) あるサディスト (残虐行為を好む人) が、動物 (犬、ウサギ、ネズミ、ヒグマ、鷹など) の体にダイナマイトをくくりつけ、導火線に火をつけ放すことにした。だが、その動物が元の場所へ戻ってきて、サディスト自身も負傷してしまった。

も、民話に対する彼の詳しさをうかがうことができる。それ以外、ロンドンは「自業自得」、「動物の復讐」のような伝説的なプロットを、1902年の短編小説『ムーン・フェイス』(Moon Face)に取り入れている。

#### 四、精神分析学の応用

研究者らは、小説、詩、演劇などの文学作品をフロイトの精神分析理論で「構造分解」をする際、都市伝説も、精神分析理論を唱える一部の民俗学者の視野に入ってきた。中でも、フロイト精神分析の観念と理論で「ボーイフレンドの死」(The Boyfriend's Death)、「鉤手の男」(The Hook)といった話を解説する者が現れ、これらの伝説に意味深長な性的な要素が潜んでいると、彼らは考えている。

アラン・ダンデス (Alan Dundes) は、この分野で最も影響力のある民俗学者で、この分野を切り拓いた、開拓魂に富んだ人といえる。彼はカリフォルニア大学パークレイ校で、フロイトの理論で民俗事象の解説する方法を唱えてきており、1969年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のあるシンポジウムで、論文「伝説の心理学」(On the Psychology of Legend)を発表した。その後、ウェイランド・ハンド (Wayland D. Hand) が編集した『アメリカの民話』(American Folk Legend)の中に収録されることになる。当時の民俗学者は資料収集の段階に留まっており、解釈、分析、説明は行っていないと、ダンデスが批判しただけではなく、その問題解決にも挑戦し、身のまわりで流行っている都市伝説に対して、心理学の立場に立って大胆な分析を行った。しかも、「民俗学者にとって、心理分析はひとつの潜在力に富んだ、明るい見通しを持つ発展方向だ」と、同業者であるほかの民俗学者を励ましている。

ダンデスの研究の中で最も有名なのは、「鉤手の男」<sup>フック</sup>に対する解釈とあってよい。これは寓意性に富んだ物語で、デートの最中に起こるかもしれないことへの女性の不安、つまり男性の意図への恐怖を伝えようとしており、フックそのものが「勃起した攻撃性のあるペニス」を意味するという。フックが、女性の横にあるドア（性的な意味での「扉」）に当たったのだが、車が急発進するとフックも折れてしまう（男性の去勢を象徴する）。結論として、物語に登場する女性（この話を語る、聞く女性も含む）は、男性が持たないものを怖がっているのではなく、男性が持つものを怖がっている。デートの際、男性は実際に「そのフックで自分の扉を開ける」かもしれないし (Dundes 1971: 21-36)、災いから逃れるには、窓を閉めるか、または「早く帰る」の意志を貫くしかない。論文では、ダンデスが「おばあちゃんの遺体が消えた」などの伝説を同じ方法で解説し、有名人伝説「ジョージ・ワシントンと桜の木」(George Washington and The Cherry Tree) まで至っている。

しかし、ダンデスのフロイト式分析方法を踏襲する研究者はほとんどいない。多くの民俗学者はフロイト式の解説を拒み、または「中身のない機械」に当てはめることに等しいとして、この方法についての懸念を表明している。ダンデスの研究は批判や嘲笑さえ受けていた。1993年刊行の『社会の精神分析研究』(The Psychoanalytic Study of Society) 第18号では、民俗を解釈する方法と道筋についての調査報告が載せられ、ダンデスにささげたものとされている。そこで、ウェスタン・オンタリオ大学のマイケル・キャロル (Michael P. Carroll) 教授は、長編論文でダンデスの研究内容を紹介し、「ボーイフレンドの死」に対する自分の研究と分析に言及している<sup>27)</sup>。キャロルによると、セックスにおいて、女性は男性より

27) ドライブデートの後、帰宅しようとするカップルがいた。目的地に着く直前、道端に車を止めたふたりは車内で「お別れのエッチ」をした。ところが、車が急に動かなくなったので、仕方ない彼氏のほうは、彼女にきっちりドアロックして「車にいるように」と伝えて、助けを呼びに行った。彼氏の言うことを聞いた彼女は、車内でおとなしく待っていたが、そのうちに、車の屋根を擦るような音が聞こえてきたんだ。恐ろしさのあまり、彼女は徹夜で車にこもっていた。夜が明けてようやく道端の人がやってきて彼女を助け出してくれたんだ。車から出て上を見上げると、自分の彼氏が木からぶら下がっていたのを発見した。一晩中彼女を怖がらせた音は、なんと彼氏の足が車の屋根を擦り続けて出た音だった。



も多くの苦しみを受けているのが現実であるにもかかわらず、物語でそれが逆転し、男性が罰を受ける側になるという。男性には妊娠する能力が備わっていないため、殺されてしまうのだ。特に重要なのは、彼らが首吊りや首切りで死ぬことである。つまり、キスしたり愛撫したりするという「ネックング」(necking)の行為によって、首を意味する「ネック」(neck)が切断され、車の屋根根上で下向きに首を吊られるようになった。このような結末は一種の逆転した関係を示している。

イギリスの雑誌『フォークロア』(Folklore)にキャロルが投稿した2本の論文、「〈去勢された少年〉-都市伝説の精神分析研究へのもうひとつの寄稿-」(‘The Castrated Boy:’ Another Contribution to the Psychoanalytic Study of Urban Legends)と「異化モチーフと民間説話の精神分析研究-〈ルームメイトの死〉再考-」(Allomotifs and the Psychoanalytic Study of Folk Narratives: Another Look at ‘The Roommate’s Death’)においても同じ思考が踏襲されている。前者の場合、キャロルはフロイトの理論に沿って、「去勢」を「欲望を満たす意図の偽装表現」と解釈し、この話が女性の「ペニス羨望」を象徴しており、無意識のうちに生まれてくる「男性を去勢しようとする」女性の欲望は、話を通して満たされているとする。精神分析という研究方向の孤立性を鑑みると、ダンデス以外といえ、明らかに、キャロルが活躍中の忠実なフロイト派民俗学者であろう。

## 五、歴史地理的・比較的方法

「アールネ・トンプソンのタイプ・インデックス」または「AT分類」は、フィンランド歴史・地理学派(Finnish School, historical-geographical method)の代表的な成果で、神話、伝説、民話の分類体系の古典として広く知られている。「民話は人類の文化史を構成する重要な部分だ。人類学者や人間社会を研究するすべての学生は、増え続けるさまざまな物語にある生活史を利用することで、自分の発見を明らかにすることができるはず

である。彼らが徹底的に理解する物語の数が多ければ多いほど、人間の知的な・美的な生活全体に対する彼らの見解も、より明確に、正確になっていく」というのが、この学派の基本理念である(Thompson 1977=1991:537)。この方法で、民話は、①動物昔話、②本格昔話、③笑話、④形式譚(累積譚と引っかけ話を含む)、⑤分類できない話、のように分類されている。

フィンランド歴史・地理学派の物語研究についての構想によれば、「タイプ・インデックスが示唆するひとつのタイプにあるすべてのテキストは、一種の起源的な関係を持つ」とされる。つまり、当該タイプのすべてのバリエーションは同じ系譜にある。この分析方法は、時間と場所によって異なってくる、話のそれぞれのバージョンを検討するもので、「比較分析法」(comparative analysis)といってよい。同時に歴史的な視角に立脚しており、「異なるバージョンにある類似のテーマは、古い時代に由来する可能性があり、古い伝説がある現代伝説の原型である可能性も考えられる」と説明している。伝統的な民話は、この学派の主な分析対象となっている。

民俗学者は、現代伝説のルーツをたどるのに多くの工夫を凝らしてきたが、そこから得た成果は、ここ数年でほとんど変化がなく、合理的に見える分析事例を収録している出版物もごくわずかしかない。たとえば、その中の成功例「解けない数学問題」(The Unsolvable Math Problem)では、スタンフォード大学の数学者ジョージ・ダンツィーグ(George B. Dantzig)がカリフォルニア大学バークレー校の大学院課程に在籍していたときの不思議な経歴は、話の原型とされている<sup>28)</sup>。

新しい伝説と古い伝説の歴史的なつながりは常に曖昧であり、概念的な側面に限られる場合が多い。中世では、怠け者で愚かな女の髪に、多くのクモが繁殖しているという寓話があったが、現代の都市伝説に見出される同じテーマの物語は、必ずしもそれを土台にしているわけではない。「のどを詰ませたドーベルマン」の場合、話の新しいバージョンと古いバージョンの高い関連性を、

28) Brunvand, Jan Harold, 1996, “Urban Legend,” Jan Harold Brunvand ed., *American Folklore: An Encyclopedia*, New York and London: Garland Publishing.

多くの情報が示しているのだが、それらは確実に同じ系譜にあるかどうかは判断できず、同じ起源を持つかどうかは、推測や仮定で考えるしかない。

ウィリアム・ヒュー・ジャンセン (William Hugh Jansen) は、45年間に収集された「ヌードでびっくりパーティー」(The Nude Surprise Party) の28のバリエーションを比較した結果、語り手が物語のプロットをどのように変更しようとしても、すべてのバリエーションは、衝撃的な場面に対する態度 (attitude)、パーティーを行う場合 (occasion)、男女ふたりが全裸で登場した結末 (aftermath)、という3つの要素から逸脱することはない。その場合はさまざまに変化し、誕生日パーティー、結婚式、男女カップルのデートなど、多岐にわたっている。結末もほぼ同じで、あまり変化がみられない。いわゆる、少年が町を離れて他郷に浮浪したり、少女が精神障害になったりするのとは基本的なパターンといえる。

## 六、構造主義の視角

伝説の構造主義的分析は、20世紀20年代にプロップ (Vladimir Propp) が行ったロシア民話の研究から始まった。プロップによる民話の形態論で使われる素材は、ひと組 (100話) の特定のタイプの民話 (fairy tale)、つまり AT 分類の中の「300-749」番に当てはまる物語を指す。まず、物語の構成要素を特殊な方法で抽出し (= 不変な要素と変化可能な要素、登場人物の名前とその特徴は変化するが、行動と機能は変わらない)、そして、これらの要素に基づき、物語の書き下ろしや比較を行い、形態学的な意味を持つ結果を得ようと試みる。こうして、プロップの研究は、20世紀の文学研究における、独創性のある模範作品かつ構造主義神話学の礎となる作品として高く評価されている。

レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss) は、

プロップの賛美者であり、彼に対する最も厳しい批評家でもある。1955年にレヴィ=ストロースが行った「神話の構造」(The Structural Study of Myth)<sup>29]</sup>の研究は、構造主義研究における「プログラム文書」とみなされている。フロイトと同様に、「レヴィ=ストロースも、知らないうちに、我々を、我々が持つ神秘的な感情の奥底まで導いてくれる優れた能力を有する」(Leach 1970=1985)。その影響は人類学、社会学、民俗学の範疇をはるかに超えているとされる。夜と昼、老人と若者、生と死、家庭内と家庭外、善と悪、理想と現実といった内在構造の様式に着目した二元論的分析もそれに伴い、民間説話研究の領域に踏み込み始めた。

1962年、プロップの理論体系にダンデスが言語学の概念を注ぎ込み、それをさらに精密化・科学化させ、北米のインディアン民話の研究にも活用していた<sup>30]</sup>。20世紀60年代、英語圏でプロップの著作が翻訳されたことに伴い、多くの学者は彼の理論を用いてより広い範囲の民間説話を研究するようになった。さらに、民俗事象または民衆生活のさまざまな面までそれを応用するケースがみられ、西洋ではプロップの追従者が数多く現れた。しかし、近年、構造主義研究が停滞しており、実際にも、この分野で作業を試みようとする学者はそれほど多くない。都市伝説というタイプの物語に人々が興味を持つようになったとき、構造主義の栄光はすでに過去のものとなっていたのである。

その一方で、マイケル・キャロルがより効率的なアプローチ・プロセスを整理し、構造主義のアプローチ・ポリシーを改善し、その操作性を向上させようとした。世界中で知られている都市伝説「ルームメイトの死」(The Roommate's Death) に対して彼は極めて革新的な分析を行い、「異なるバージョンにあるすべてのディテールがどれほど大きく変化したとしても、ひとたび現れると、それらを語り手と聞き手の頭の中の〈象徴的等価

29] Lévi-Strauss, Claude, 1955, "The Structural Study of Myth," *The Journal of American Folklore*, 68(270): 428-444. (= 1972, 田島節夫訳「神話の構造」『構造人類学』みすず書房, 228-256.)

30] 原文は「1934年」だが、のちに、これが「1962年」の誤植 (ダンデスは1934年生まれ) だったことが判明。詳しくは、ダンデスの博士論文 Dundes, Alan, 1962, *The Morphology of North American Indian Folktales*, Indiana University. を参照すること。

物) (symbolically equivalent) とみなしてよい」と、キャロルは論じている。「ルームメイトの死」に出てくる3つのまったく異なるバージョンをキャロルが比較した結果、本質上、この伝説は性的なものであること明らかになった。その考え方から出発すると、話が強調したいのは「男性による女性への暴力」で、若い女性が持つ「性的な初体験」への恐怖心を表していると考えることができる (Carroll 1992: 225-234)。

## おわりに

都市伝説は、民間の語りの伝統を構成する重要な部分である。「物語はみずから出尽くしてしまうことがない。物語は自分の力を集めて蓄えており、長い時間を経た後にも、なお展開していく能力があるのだ。それは何千年もの間のピラミッドの小部屋に封印されており、今日に至るまで、その発芽力を保持していた穀物の種子に似ている」と、ベンヤミン (Walter Benjamin) は指摘している<sup>31)</sup>。ともかく、都市伝説という民間にある語りの伝統かつ物語タイプ (narrative-type) は、古い話か新しい話か、戦争の時代か平和な時代か、農民が集まって語るものか都市の高級喫茶店やバーで語られるものかにかかわらず、常に活発なイメージで上演されている。そればかりではなく、都市伝説は民衆の日常生活を構成しており、特に暇なとき、娯楽を楽しむとき、コミュニケーションをするときに必要なものとなっている。現代社会でレジャーと情報消費を構成する重要な部分とみなされ、民衆の日常生活の面でも、このような、非公式的な情報を消費する行為または娯楽の手段は特別な意味を持っている。社会文化全体の秩序も、都市伝説の流布によって強化され、再構築されている。

このように民間説話を分析、解説する視角と方法は多くある。大まかにいうと、上述の理論に関する観点と方法を、3つのカテゴリー、「意味

(meaning) の解説」、「形式と構造 (form and structure) の検討」、「実証 (empiricism) の追究」に分類することができる<sup>32)</sup>。神秘主義、超自然主義、文学的視角は、伝説そのものの信憑性と、観察によって得た事実や過去の歴史が残した記録でその信憑性を検証できるかどうかの作業をあまり重要視せず、むしろ、伝説に見出される人生の意味と思想的価値を重んじる。いわば、幽霊話にせよ怪奇事件にせよ、人々を興奮させ、酔わせ、深く思考させるからこそ、伝説としての価値がある。

言語学的解釈、構造主義的分析の視角は、物語タイプとしての都市伝説の形式表現と構造上の特徴に注目している。特に、都市伝説の上演プロセスに不可欠な「章」と「幕」、伝説を成り立たせる要素、要素同士の関係が重要視されているだけではなく、より効果的な語りができるための、各要素と「幕」を巧みに調整する語り手のテクニクという現実問題にも関心が寄せられている。

歴史・地理的方法、比較分析の視角は研究者が持つ慎重な態度を示している。都市伝説研究の集大成、アメリカ・ユタ大学のブルンヴァン教授は、一般的に歴史的・比較的研究方法の提唱者、実践者と思われている。膨大な資料を収集した上で、伝説の誕生、変容と発展に対して明確な説明を行ってから、はじめてそれを解釈、分析することが可能になると、彼は確信している。こうした方法を唱える彼らは、説得力のある証拠と資料が見つかるまで、恣意的な判断を下すことがなく、常に実証的な資料の発見と追究に力を注いでいる。都市伝説の起源を探る作業、もしくは、それは「実際に起きた事件」について検証する作業はほぼ不可能といっても過言ではない。なぜなら、起源をたどることができる事例は非常に少ないからだ。

上述の内容と比較していうと、フロイト主義の研究はさまざまな道筋と要素を統合しており、人生の意味と価値に焦点を当てながらも人生の背後

31] Benjamin, Walter, 1936, "Der Erzähler: Betrachtungen zum Werk Nikolai Lesskows," *Orient und Occident*, Neue Folge 3: 16-33. (=1969, 高木久雄・佐藤康彦訳「物語作者」『文学の危機 ヴァルター・ベンヤミン著作集7』晶文社, 178-221.)

32) 筆者 (原著者の張敦福と魏泉) は、今後とも都市伝説研究の社会学理論と方法に関する論文を執筆し、論考をさらに深めていきたい。

にある深層構造、いわゆる無意識と性的なものを発見しようとする。したがって、キャロルの研究は構造主義的なものと称してよく、フロイト主義的なものと称してもよい。同時に実証調査に重点を置いたものともいえよう。彼の根拠となっているのは、精神分析理論から取り出したものだけではなく、多くのバージョンやバリエーションを考察した上で築かれたものでもあり、決して説得力の弱いものではないと判断してよいだろう。キャロルも、伝説に関するほかの研究成果を傍証として引用し、伝説の内容だけに留まっておらず、伝説が上演される時のコンテキスト、聞き手の状況なども分析していた。

都市伝説研究では、迅速かつ実用的な分析モデルを作成しようとする試みはなく、ある理論、方法をめぐる検討に対する制限もない。異なる見解の共存によって、この分野に対する参加者の理解と認識も深まっていく。都市伝説の理論問題と現実問題がさらに知られるようになり、さらなるセンシティブな理解、批評を可能にするための礎も築かれた。解説、解釈、分析と評価は、必ずしも研究の成功を意味しているわけではなく、研究者同士の合意を意味しているわけでもない。むしろ、その中で研究が深まっており、都市伝説をめぐる論争の水準も次第に高まっていった。

#### 参考文献

- Brunvand, Jan Harold, 2001, *Encyclopedia of Urban Legends*, New York : Norton, 158.
- Carroll, Michael P., 1992, "Allomotifs and the Psychoanalytic Study of Folk Narratives : Another Look at 'The Roommate's Death'," *Folklore*, 103(2) : 225-234.
- Coleman, Loren, 1983, *Mysterious America*, Boston : Faber and Faber.
- Dégh, Linda, 1991, "What Is the Legend After All?," Paul Smith ed., *Contemporary Legend Vol.1*, Middlesex : Hisarlik Press, 11-38.
- Dundes, Alan, 1971, "On the Psychology of Legend," Wayland D. Hand ed., *American Folk Legend : A Symposium*, Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press, 21-36.
- Dorson, Richard M., 1968, "Legends and Tall Tales," Tristram P. Coffin ed., *Our Living Traditions : An Introduction to American Folklore*, New York : Basic Books, 154-169.
- Leach, Edmund, 1970, *Lévi-Strauss*, London : Fontana Press. (=1985, 王慶仁訳『列維-斯特勞斯』三聯書店.)
- Thompson, Stith, 1977, *The Folktale*, Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press. (=1991, 鄭海ほか訳『世界民間故事分類学』上海文芸出版社.)

## Theoretical Perspectives for Analyzing Urban Legends

### ABSTRACT

Theoretical perspectives and methods on urban legends have become more diverse since 1980s. Now we have “Fortean Approach”, the linguistic analysis (or linguistic-structural analysis), the literary criticism, the psychoanalytic approach, the comparative historic-geographic approach, and the structuralist perspective. Each has developed its own direction, style, and route. These perspectives and methods can be categorized into three categories: “the quest for legend’s meaning”, “the formal-structural analysis” and “the empirical research”. Multiple coexisting research routes have broadened and deepened people’s awareness and understanding for urban legends, and which have led research to a higher level.

The purpose of this paper is to introduce such perspectives and methods, and give a simple evaluation to grasp the whole picture of urban legend research in western academia.

**Key Words:** urban legend, theories and methods, urban folklore